

相手に関心を寄せ、知ることからはじまる「災害時の備え」

大手前大学 国際看護学部 助教
小村 佳代

ある暑い夏の年でした。Aさんから「社会の大半の人たちが、視覚障がい者の私たちをよく分からないから腫れ物にさわるような扱いをする。私たちのことをよく知らないから何も出来ない人だと誤解されている」と、話を聞きました。そして、「看護師さんでも両手で私たちを後ろ向きで誘導しようとする人が多いの」との指摘でした。視覚障がいは運動能力に支障はないので、同じ方向を向いて肩や腕をちょっとお貸しすれば歩けます。案外危険な誘導をしている看護師の客観的評価を意外な形で伺うことができました。

私は災害時に避難行動要支援者となる視覚障がい者の避難行動について研究をしています。前述のAさんの話は研究対象者へインタビューをした時の1コマでした。他にもいろんなエピソードに刺激をいただいています。「日頃から、私たちのこと、分からないから私たち放置されるんですね。地域での防災訓練もあるかどうかわかりません」回覧板に書いてある防災訓練も当然見えないのですが、口頭でも伝えてもらえない。中には、果敢な方も居られます。防災訓練があることを小耳に挟んだBさんが訓練への参加表明をしたところ、『怪我をするかもしれないから、Bさんは参加しなくていいよ』と近所の人に言われ、それでも強引に参加したら民生委員さんがぴったりくっついての訓練になった・・・』と笑って話してくれました。

前述のAさんやBさんは、身近にいる視覚障がい者を知ることから始めて欲しいと、自分たちの生活の様子やどのような支援をして欲しいかという語りの活動をしています。私も交流を通して、身近になった彼らから教わることが多くあります。Cさんと駅前の大通りを歩いていた時、Cさんを点字ブロックの上へのせようとしながら歩いていた私に「小村さんは、なんで私を点字ブロックの上へのせようとする？一緒に歩いているからそんなことしなくていい」と言われ、私は目から鱗が落ちる思いがしました。点字ブロックは視覚障がい者に絶対不可欠なものという固定観念に囚われており、二人で歩いていても必要なものと捉えていたのです。本人から指摘をしてもらえる心の距離の関係、「身近な存在」となって、気づいたことでした。

私が出会った中途視覚障がい者の方々は、災害時に要配慮者や避難行動要支援者となることを望んでいるわけではなく、彼らにとってそれは不本意なことです。障がいがあるがために災害時に生き抜くことが難しくなり、更に、健常な被災者に比べ、災害によって変化した環境への適応は何倍も不利となります。そのような状況の中で、晴眼者（眼の見え方に不自由のない人）から「ちょっとした心遣い」である眼の代わりの支援があれば、彼らは心身ともに救われると私は考えます。

つまり、よく知らないということが的確な支援につながらないという看護の基本を、視覚障がい者から再度教わっています。だからこそ、普段から、災害時要配慮者、避難行動要支援者である方々に関心を寄せ、心の距離を縮められる関わりをしておきたい。これが私の考える災害看護の一つであり、日頃からできる要配慮者、災害時避難行動要支援者へ向けた支援、災害時の備えであると考えます。